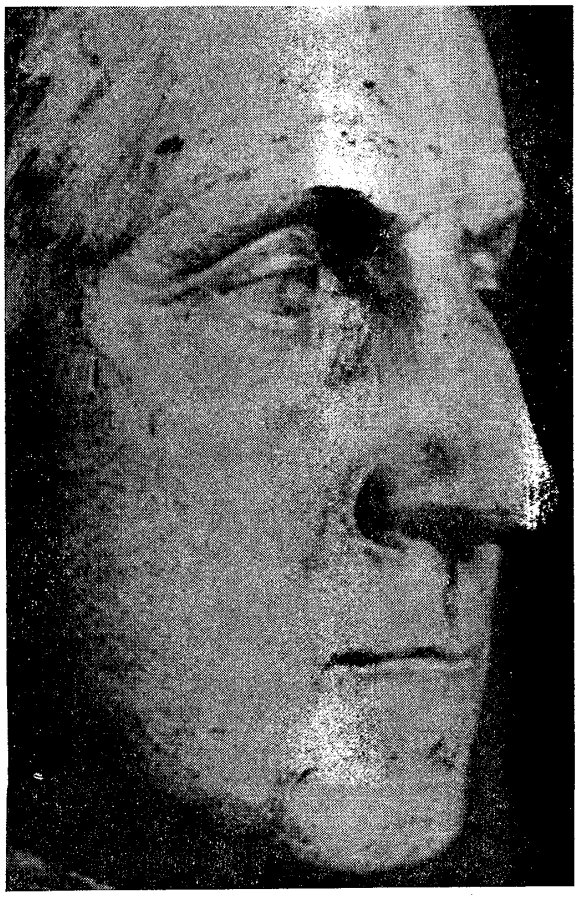
例会講演抄録

ジョージ・ワシントンの義歯について

新藤恵久*

米国初代大統領ジョージ・ワシントンは，23才の時，一本歯を失って以来，18世紀の未熟な歯科技術に大分悩まされたようである。ワシントンの二種類の肖像画を比べてみると，当時の技術水準を知ることができる．一つは，フランスの彫刻家フードンの作品をもとにしたもので，歯のまだあった53才の時の顔と，ギルバート・ステュアートの肖像画，即ち，総義歯となった時代のものである．いずれも切手，コイン等に広く使われている．前者は現在，切手，25セントコインに見られ，闘士として活動家であったワシントンのより正確な模写である．これに対し，ステュアートの画，即ち，総入歯を入れたワシントンの顔である．総義歯を入れた顔は，上下顎の間が短縮し，下顎前歯の欠損に伴う下唇輪郭のカーブの消失により，ぶかっこうな顔になってしまった．このため，ステュアートは，唇の下にロール綿を入れ，これを補おうとした．しかし，その結果は，慈悲深いおばあさんの様な顔になってしまった．



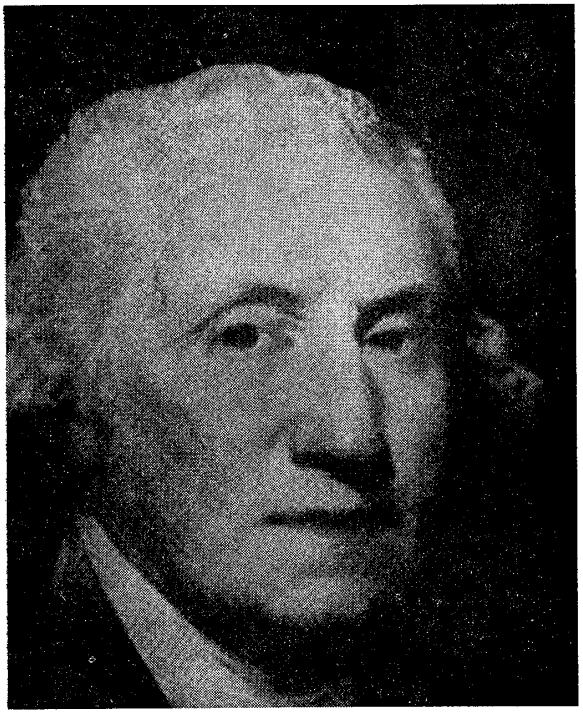
まだ歯牙のあった時代のワシント肖像

この義歯は，ニューヨークの開業医で当時最も有能といわれた，ジョン・グリーンウッドに作らせた4つの義歯の1つである．現在，この4つのうち3番目のものは，メリーランド大学よりワシントン市の博物館に移して陳列されており，4番目のはワシントの棺に入っている．現在，私達が見られるのは3番目のものである．上顎は金属のダイの間で圧印された厚い金で，米国で最初の圧印床といわれている．この金床に，1本1本歯の形に彫刻したカバのアイボリがとりつけてある．これは時々とりはずされ改変されたことが，ワシントンのグリーンウッドあての手紙により知ることができる．これらの歯は金のスクリエーでとりつけてある．下顎は金のベースをもたず，歯が木のピンでアイボリのバーにとりつけられていて，臼歯部は平で咬頭がない．これは床の安定のために平にしたのだそうである．この上下の床は，後方でフイルスプリングにより結ばれている．そのため，義歯を入れたワシントンは，唇をたえず緊張させる癖がついてしまったとのことである．また，義歯が飛びだすのを恐れて，人前でクシャミをしなかったと伝えられている．

ステュアートの肖像画では，米国第1代大統領としてはお粗末だというので，1932年より25セント貨は，53才の時の胸像を用いるようになったのである．義歯に関する手紙の1つ，1798年の12月28日，グリーンウッドよりワシントンへの手紙は次の通りである．

〝閣下，2セットの義歯を郵送いたします．1つは，部分的に古いバーに固定したもので，もう1つは閣下にフィラデルフィアから送っていただいたもので，私が受取った時には真黒に変色しておりました．これはきっと，閣下が義歯をポートワインの中に漬けたか，ポートワインを飲んだか，いずれかのためでありましょう．ポートワインの渋味は歯の光沢を取り去り，酸はすべて，あらゆる歯や骨を軟かくする性質を持っています．酸は，あらゆる種類の象牙を加工するのに用いられます．それゆえ，酸は歯にとって大変有害であります．私は，閣下が夕後，義歯を外して，きれいな水で洗ったあと，もう一方のセットにはめ込んでおかれるか，ブラシにチョークを少しつけて磨いて，きれいになさるか，いずれかをなさるようお勧めいたします．ジョン・グリーンウッド

* 本会理事　SHIGEHISA SHINDO



総義歯装着後の肖像

義歯が黒く変色することは，もちろん，ポートワインの中に漬けることによって起こりうるのであるが，義歯を口にはめていても，ポートワインに漬けられる（すなわち，ポートワインを飲む）ことのほうがあり得ることなのである．グリーンウッドは，その点を如才なく言ったわけである．

このような義歯に比し，日本では，現在と同じ吸着力を応用した木床義歯が，これより100年も前から使用されておった点は，大いに自負できることである．前歯の形態も一般的にずっと精巧であり，長年実用に供せられたものも多くみられる．この木床義歯については，いろいろ研究されているので省くが，しかしながら，この技術は単なる日本人の器用さ，技能で終わり，科学技術となることなく，他国への何の影響もなく消えてしまったのは，まことに残念なことである．

松風陶歯のできるまで

荒　木　紀　男*

当時 New York に在住の岡田満（1911年荒木紀男をたよって渡米，元慶大医学部教授）と滝藤治三郎（陶器輸出商）が会談のとき，滝藤は，歯科用の紙ポイントは Johnson and Johnson 会社が作り，その紙は日本の大和紙で私の店で取り扱っている．これを日本で作って逆輸出を考えてはといったが，岡田は紙ポイントより陶歯を完成することが重要と話した．そこで滝藤は取り引き関係の友人松風嘉定を紹介すると，ホテルで3者会談した．松風は松風工業株式会社を設立，国産碍子製造の先駆者で，1915年5月第1回渡米のときで，岡田は松風に国産陶歯をつくることを進言した．

松風は陶歯事業はまだ考えていなかったが，それを仮定したとき適任の技師はあるかと云い，岡田は荒木紀男を推薦した．そして滝藤，岡田，荒木と松風との会談となった．

松風は，陶歯事業をきめる前に，その会社工場を視察したいという．松風の名はアメリカの陶器界には知れわたっているので，荒木は松風では見せてくれない．日本から来た歯科医ということで，知人の S. S. White 会社 New York 出張所主任 *JOHN DREUEN* 氏に交渉し，彼から本社に連絡承諾を得た．日を選んで松風と岡田は *PHILADELPHIA* の本社に行った．そして Dr. K, Matsukaze, Dentist, from Japan と訪問録に署名した．

表彰状
技師長
荒木紀男
バイオ陶歯研究ニ當リ其主宜トシテヲ年研鑽努力充ツ初期ノ目的ヲ達シ遂ニ之ガ發賣ヲ為スヲ得ルニ至ラシメタリ依テ茲ニ之ヲ表彰ス
昭和十四年三月十五日
松風陶歯製造株式會社

バイオ陶歯研究に対する表彰状

材料は案内役の工場長が岡田の手にのせて説明，岡田は日本語で説明．松風に渡し，工場長に返えす．この過程で岡田は指の間に材料を少量ずつはさんで盗取した。ホテルで，この材料を出したところ松風はその数倍量を出したという．

松風は荒木に陶歯研究を委嘱し帰国，1918年秋荒木の帰国に依り松風工業会社第2工場内に松風陶歯研究所を新設，具体化した．1922年5月松風陶歯製造株式会社を設立，荒木は技師長として陶歯製造の準備に入ったが，製造用の器具の一部がアメリカから遅着したので苦労し

* NORIO ARAKI 元松風陶歯製造会社技師長